

佐伯和之は久々に早く帰って来た自宅の居間で、つい先ほどまで一緒だった二階堂龍介とかつて過ごした鑑識課時代を思い出していた。群馬県警からやって来た龍介はいつも穏やかな微笑を唇に浮かべていて、海千山千の警視庁鑑識課の連中をもものともせず、常にマイペースで完璧な仕事をこなしており、その時も、佐伯が指紋のサンプルを抱えて戻ってくる時、顕微鏡に目を貼り付けたまま十分前とまったく変わらない姿勢でなにやら真剣に覗いていたのだった。

噂によれば東大法学部卒業と同時に司法試験に合格し、修習を始めた方がいいが途中で放棄、進路をまったく変更し警察大学校へ入ったあととはたった二年の地方勤務を経て、あれよあれよという間に本庁へ引き抜かれたということだったが、虎視眈々とあら捜しばかりしている警察組織の中で飛びぬけた美貌を持つこの男が、唯一名前を呼び親しげに話しかけるのが捜査一課きつての無口、八係主任の朝倉誠吾であるという点に置いて、非常に意地の悪い憶測が飛び交ったものだった。全庁の女性たちの熱い視線を一身に浴びつつもまったく女つ気のない龍介に、佐伯が興味を持たなかったと言えは、それはうそだったし、そうしてあの夜も遅くまで何だかんだと理由を付けて残っていたのは、その夜こそは何としても飲み誘おうという魂胆からだったのだと思い出し、苦笑いが出た。

「二階堂、今夜予定は？」

声が上がらないようにするのだけで精一杯だった。久々に心臓がどきどきしたのを覚えている。

「え？」 たつぷり十五秒も経ってから、龍介はやつと顕微鏡から顔を上げた。

「ごめん、何て言った？」

「あ、いや、今夜、どうするのかなんて」

「何もないよ」と言った後、ニヤリと微笑んだ。

「飲み誘ってる？」

「うん……」

佐伯の心拍数が一気に上がった。

「いいよ。明日休みだし」

そうして龍介はあっさり承諾し、顕微鏡を片付け始めたのだった。佐伯は、それだけで肩の力が抜けてしまつて、後のことはなるようになれと思つたのだったと自分を振り返つた。思わず微笑んだ。あのころは、あれでも自分は、一番自分らしかった。

八階から下へ向かう途中六階でエレベーターが停まり、運の悪いことに朝倉誠吾が乗つてきた。深遠な瞳をひたと佐伯へ据えた誠吾はそのまゝ頭からつま先まで一瞥すると、「邪魔か」とひとこと言い、二ヒルな微笑を唇に浮かべた。

「今夜は佐伯と飲みに行くよ」と、龍介が言つと、誠吾は「飲みすぎるなよ。帰る時に電話しろ。迎えに行く」と、左手に持つていた携帯を上げた。

「ちようどお前に電話しようとしていたところだった」

「さつきかけたら圏外だったよ」

「資料室へ入つていたから、電波が届かなかつた」

「そういうわけで、今夜はひとりりで食べて。冷蔵庫にミートソース残つてるよ」

「わかつた」

一階へエレベーターが着くまでの間の、二人の会話がそれだった。

佐伯の頭は混乱を来たしていたが、平静を装つて、「じゃ、また」と本庁前で誠吾と別れた。誠吾は「ああ」とだけ応え、ちらりと龍介に微笑んで背を向けた。

霞ヶ関駅まで歩く間、龍介はひとり笑つていた。肩を並べる佐伯を見て言った。

「まだ一緒に住んでないよ」

「そ、そうか……」佐伯は妙にどぎまぎした。

「いや、それは個人の自由だし……」

「誠吾はやきもち焼きじゃないよ。安心した？」

「それは……」

「まあ、いいよ」と龍介は微笑んだ。

渋谷で一杯やりながら佐伯は改めて目の前の同僚を眺め、自分の僅かな心の動きが、何故か早々と薄れていくのが判った。自分はバイセクシャルで、初めて会ったときから龍介に惹かれていたが、さっきエレベーターの中で龍介と朝倉が一緒にいるのを見た時に、その気持ちは自然と消えてなくなつたと、正直に話した。龍介は佐伯の目を真っ直ぐに見ながら話を聞き、「よくあることなんだ」と微笑んで、「きみの気持ちは知っていた」と言つた。

「二階堂は、その、同性愛者なのか？」

「違うよ」と、今度こそ龍介は大笑いした。

「じゃあ、俺と同じか」

「いや、それも違う」

「朝倉とは？」

「何もないよ」と、ジントニックを一口飲んで、「今のところは」と続けて笑つた。

「きみたちは、付き合っているのかと思つた」

「付き合つてはいないよ。ただ、ずっと一緒にいて、離れることはお互いに考えられないだけ」

「それは恋じゃないのか」と、佐伯は聞いてみた。純粹な興味だった。

「うーん」と、龍介は腕組みをした。微笑んでいた。

「恋と言えば、言えるのかな……。高校入学した時に、誠吾とは席が隣同士だったんだけど、その時からもうずっ

と一緒にいる。それが当たり前だと思っっている」

「俺は、そういう人間に出逢った事がない」と、佐伯は言ってみた。事実、なかった。

「自分の半分が見つかったというか、そんな気持ちがあった」

龍介の瞳は優しく、遠くを彷徨った。

「誠吾を見た瞬間に判った。出逢うべくして出逢ったという感じだった。それは多分、誠吾もそう感じていると思う」

「約束だったように？」佐伯は、なんとなく判る気がした。

「そう」龍介が佐伯を見て笑った。白い歯がこぼれた。「約束だったんだと思う」

「惚れあう約束だったんだな」と、佐伯も笑顔になった。

いにしえからの。

「多分。本人には、言ったことはないけど。反応が怖い」

そうして、龍介は笑い出したのだった。

数年を経た後に、今またこうしてその龍介と同じ事件と一緒に追っていることを、佐伯は素直に嬉しいと思った。龍介と誠吾の関係は佐伯から見れば相変わらずで、その不思議な縁を身近にいてこうして見ていられるだけで、どういいうわけか満足だった。

涼香の結婚式を終えて二次会の後片付けをしたあとは、俺は龍介と共に急いで帰宅し、着替えもそこに家中の引き出しという引き出しをひっくり返して、かの政治家の娘の結婚式の招待客名簿を探していた。キッチンカウンターで龍介は水割りを作りながら、「誠吾」と呼んだ。

「ん？」

「几帳面だと思っていたよ」と、龍介はくすくす笑い出した。

「お前が来る時には必死で片付けていたんだ。ついにばれたか」手を休めないで、俺は照れ笑いをした。

「捨ててはいないはずなんだ。何てだったって、学芸会の記念だしな……」

「いつかどこかで使う時が来るという刑事の予感って言った方がさまになるよ」

「実際、使う時が来たんだけどな」

「どうでもいいけど、誠吾」

「え？」

「タキシード脱いでよ。まぶしすぎる」

「それはこつちのセリフだ」と言い返しながら、俺は内心意表をつかれながら龍介を見た。俺の容姿について龍介が何かを言ったのは、この二十三年で初めてだった。顔に火がついた。そこで、手が厚い和紙に触れた。名簿だ。

「あつた」

足の踏み場もなく書類の散乱した床を、水割りのグラスを二つ持って龍介が近づいてきた。目が爛々としていて、こういうときは相変わらず色気のある視線を飛ばすのだった。

三百人以上の名が連なる招待客名簿を見た途端に俺は戦意喪失しそうになったが、龍介は俺にグラスを押し付けてそれを奪い、目を皿のようにして一名一名を追っていった。

「明日コピイして、木村と佐伯にも渡そう。知っている面々と女性を消去していけば、もうそんなに残らない。ざっと百二十人。時間がかかってもやろう」

「受付係がこんなところで役立つとは」

「横に職業と年齢も書いてあればもつとよかったのに」

「贅沢を言うな」

「とりあえず、乾杯ね」

名簿を大事そうにローテーブルの上に置き、龍介はグラスを俺から受け取って掲げた。

「何に？」と訊くと、「まぶしい誠吾に」と言っただけで、こちらの反応を見て大笑いした。

龍介と一緒に暮らすようになってからはベッドを解体してそこを仕事部屋に改造し、俺たちは八畳の和室に布団を二つ並べて寝ていた。東向きその部屋は4LDKに一人暮らしだった俺はほとんど使ったことがなかったが、そうして今はまだ寝室然としている和室を見て、俺はこの家を買った時、いつか龍介と暮らすことになると考えていたのではないかとふと思った。何か見えない強大な力に翻弄されているという直感には依然として俺の心に存在し、すべてが最初からシナリオ通りに進んでいるのではないかと思った。風呂を終えて浴衣姿で戻ってきた龍介は、タオルで髪を拭きながら布団の上へ正座しており、つい数時間前タキシードの麗しい立ち姿を惜しげもなく披露していた男が、今はこの俺の前で自然体で寝屋を共にし、くつろぎ、微笑んでいることが信じられなかった。二階堂修哉を失った時と同じような不穏な空気を感ぜながら、時間がないと再度思ったのだが、だからと言って、何をどうすればいいのかはまるで判らず、こんな焦りの中ではフェアではないというプライドもしくは意地のようなものが一線を踏み越えることを俺に禁じていたが、二十三年間を共に過ごしてきた龍介には、今でもやはり異常なほど惹きつけられ、次第に俺の信念が揺らいでいくのも事実だった。俺のそんな視線に気づいた龍介が顔をこちらへ向けるのを平然と無視して寝返りを打つという行為は、とてもではないがでさそうになかった。結局俺は布団から身を起こし、タオルで龍介の髪を拭いてやる間、正面で目を閉じ、微笑しておとなしく頭を拭かれている美しい友に見惚れた。一度でも手を止めると自分が何をしでかすか判らなかつた。そう思った途端に両手は動きを止め、俺はタオルをそのへんへ放つて龍介をそっと抱いた。龍介は一瞬置いて、しなやかに俺の背へ両腕を回し、「誠吾の髪も濡れるよ」と言った。俺が「かまわない」と言う、「何を考えているの」と囁いた。「不安なんだ」と俺が言う、龍介は「もうきつと、始めから決まっていることなんだ」と言った。龍介の身体を離して、顔を見つめた。

「お前は何を思っている」

「遠い空が、だんだん薄暗くなつていく夢を見る」と言つて、龍介は目を伏せた。

「誠吾を失いたくない一心だったけれど、時々不安になることがある」

「親父が死んだときからか」

「もつと前から。父さんが死んだ、あの夏から」

それを聞いて、もう俺は何も判らなくなった。再び龍介を抱き寄せた。首筋に顔を埋め、自分を鎮めようとしたが、風呂上りの龍介の肌を感じ、逆に身体の奥が熱くなった。

愛しているとまた自覚し、失いたくないと、はつきりと思った。

ひたひたと取り囲む死の気配を、俺はそうして必死で振り払おうとしていた。

池袋西口の混雑した地下道で渡した招待客名簿のコピーを見た木村は、「こいつはすげえな」と舌なめずりでもしそうな勢いで凄絶な笑みを繰り出した。

「政治家のお友達オンパレード。身内の名前も多数だぞ。ここから誰かの面が割れたらそりゃあお上がひっくり返るってもんだ。倉沢は貧血くらいで済むかもしれないが」

「どういう意味だ」

「そのうち、倉沢から話があるだろう。一課の意向としては、事件から表面上、全面的に手を引いた」

「表面上」を強調した。

「裏面は？」

「遠山刑事部長のおでましよ。あの熱血漢倉沢と真鍋のコンビと遠山が、黙って潰されるワケはないと思っていたら、案の定だ」

木村は、ふん、と鼻で笑った。嬉しいのだ。

「まあ、上司を見方につけられるなら、話は早いからな。俺は佐伯と動く。お前は倉沢と話をつけて、あとは二階堂と待機していてくれ」

「わかった」と言うと、木村は「じゃあな」と背を向け、その身体はあつという間に人ごみに紛れていった。帰宅を急ぐサラリーマンの群衆から頭ひとつ分余裕で飛び出ている、あいつが尾行をするときにはひと苦労だろうと思ったが、俺

も同じ背丈だということを思い出した。

携帯を取り出して龍介に電話した。無性に声が聴きたくなった。

遠山哲司は考えあぐねた結果、妻が二泊で友人たちと伊豆へ旅行している隙に、倉沢浩二を自宅へ呼んだ。上下管理を徹底するという名目はさっさと高岡警視監の暴露話へ取って代わり、自分は部下を守る意向だと話した。刑事部長の自宅へやってきた気心の知れた同僚は、それでも最初は腹を探るような顔をしていたが、遠山の話聞いて「そんなことだろうと思ってた」と、吐き気がするとでもいうように顔を歪めた。日本政治の莫大な権力者を相手に、さっさと尻尾を巻いて背を向ける上の体制に虫唾が走り、同時に、そんなやつらを頂点に持つ組織にいることに嫌気が差したといった表情だった。そんな男の娘の結婚式で司会までやらされた恥は七代忘れぬと言った勢いで、倉沢は言った。

「俺はあからさまに部下たちを脅された。実を言えば、そっちの方がはるかに気にかかつてはいるんだが」

「お前もか。俺もだ」と、遠山は言った。

「俺は、朝倉の父親を知っている。もう二十年以上も前だが、宮城の全国警察拳銃射撃大会で見た。抜群の腕前、おまけに凄まじい美貌の持ち主だった」

一瞬、昔を懐かしむような顔をした遠山を見ながら、誠吾の美貌は父親譲りなのだと思った。遠山といい、真鍋といい、自分の知らない部下たちの父親の顔を知っているというだけで、場違いな嫉妬心が沸いた。

「高岡はお前に《県警内での不祥事》の話をしたか」

「ああ」

「俺には、朝倉賢吾が銃の操作を誤って暴発し、相棒の二階堂修哉を死なせたと言った」

やはり彼らは相棒として、かつての時代を一緒に走っていたのだ。そして、最悪の結末を迎えた。自分の想像が現実となり、倉沢は臓腑が震える思いがした。薄暗い予感が脳裡をよぎっていった。

「二階堂修哉が殺害された話のすぐ後に、朝倉の父が今年自殺したことを付け加えたから、まるでそれで悟れと言っているようだった。暴発なんてことが……」

「それだ。繰り返すが、俺は宮城で朝倉賢吾の射撃の腕を見た。満点優勝だ。後にも先にも彼以外にいない。その賢吾がそんな過失を犯すと思うか？ 俺は思わない。そこでだ」

遠山は姿勢を正した。

「俺は山梨県警へ行く。お前も来るか」

「真鍋と同じことを考えるんだな」

「真鍋もか」

「彼は、二階堂修哉を知っている」

今度は遠山が呆然とする番だった。「なんだこれは。何かの運命か」

自分も同じことを考えていたなどとは、倉沢はとも言えなかった。言ってしまったえば、繋ぎとめていた縄が切れて、小さな方舟がひとりでに漕ぎ出して行ってしまうような、嫌な予感がしていた。

藤堂聡は県警の自室で、突然入った警視庁からの電話に対応していた。

遠山と名乗る刑事部長は、先日東京で発生した事案に関し、二十一年も前に山梨で起こった事件を参考までに伺いたいと言ってきた。この夏に朝倉賢吾が自害したことを知っている、当時の話を伺えるのは本部長の貴方しかいないと淡々と話す、本庁幹部特有の冷徹な声が受話器を通して聞こえてくると、藤堂の記憶は一気にあのガスのかかった夏の深夜へ飛び、同時に則子の絶望に打ちひしがれた顔を思い出した。ついで、賢吾と修哉の後ろ姿が眼前に蘇り、二人とももうこの世にはいないのだと、急に激しい悲しみが襲ってきた。

自分の生きている限り、同僚たちの名譽にかけても秘事を守り続けようと決意を新たにしたのは、先日偶然引き出しから賢吾たちと一緒に撮った写真を見つけた時だった。それが定年まであと数ヶ月を残すのみという十一月の半ばに、こん

な形で再びあの夏の悪夢へ引き戻されるとは思ってもみなかったが、心のどこかには、ついに来るべき時が来たのだと身構える自分もいた。一人の現職警察官の不可解な死を、県警に居ながら隠し通せるはずはないと判っていた。今まで沈黙を守ってこられたのは半ば奇跡と言えるのだと、弱気になる自分が情けなかった。

「お話出来ることは、何もありません」

「朝倉賢吾と二階堂修哉の間で、事故が発生したと伺いました」
額に生汗が浮かんだ。

「事故ではありません。第三者による殺害事件です。犯人は逃走中のまま、時効が成立しました。朝倉参事官と二階堂君の間でというのは、正確ではありません」

「私は、公安部長から聞いたことを、そのままお話ししております」

「県警の名に懸けて、否定します」

「お会いしていただけないでしょうか」

「お断りします。いらしていただいても、そちらの時間を浪費させてしまっただけですので」

「実は現在、上層部がかつての事件を匂わせ、私の部下たちに不当な圧力をかけています。朝倉と二階堂の息子たちです。公安の言ったことが事実無根ならば、私はそれを何としても証明し、彼らの立場を守りたい」

遠山の言葉に、藤堂はこの夏、賢吾の葬儀で実に久しぶりに見た息子の誠吾と、二階堂の遺児、龍介の姿を思い浮かべた。死の静寂に忽然と浮かび上がる彼らはまた、父親たちの軌跡を自らが進んで辿っていくようだった。

「貴方のお気持ちは充分にお察しします。しかし……」

「二十一年前の調書を見せていただくだけで結構です」

「すでに時効の成立した懸案です」と、藤堂は繰り返した。

もっともらしい調書は、賢吾と二人きりで捏造した。狂った晩だった。賢吾は、直視できないほど憔悴していた。震える左手で、一行一行を書き進めていた。その書類を何度も何度も読み返し、最後に俺は自分で判をついたのだ。賢吾と修

哉の名譽を守るためというよりは、則子のために。

あんな形で泥沼の双六に勝たなければならなかった、誰よりも愛する女のために。問題は死体検案書だ。もしあれを遠山が見たいと言ったらどうする？

弾丸は身体を貫通しなかった。体内に残ったのを取り出して、賢吾に渡したのだ。種類は藤堂が後に改竄したものの、少し頭の働く人間なら、それではその証拠品を、こちらがどうしたのかと詰め寄るだろう。まったく違う事件で採取した弾丸を見せるか？ そんなことで、警視庁の目を騙せるのか？

そこで藤堂は気持ちの悪い疑惑へ辿り着いた。

あの時の監察医はどうした？ 何と言う名前だった？

今は、どこにいる？

「調書だけでしたら、こちらからファクスで送信します」

「どうしてもお会いしていただけないとおっしゃるのなら仕方ありませんが、調書は現物を確認したいので、私が伺います。出来れば一両日中に」

拒むことを許さない遠山の口調だった。

部下を守りたいというのは本心だろう。だが、何よりもこの男は「事実」を知りたいのだ。だがそれは同時に誠吾と龍介を守るどころか、二人の父親たちが背負った別の罪業を暴露することになるのを、遠山が知る由もないのは当然だった。純粹に、無性に、ただひたすらに愛し合ったという、赦されることのない罪を。

賢吾と修哉の縁に魅せられた人間が、ここにまた一人いる。

「明日の午後、六時にお待ちしております」

藤堂は、ついに折れた。

「ありがとうございます。一課長の倉沢、特殊犯の真鍋と参ります」

そう言うと、遠山は付け足した。

「倉沢は一課長就任前、特殊犯管理官として、長年朝倉と二階堂の働きを見てきました」
 受話器を置き、俺はどうしたいのかと藤堂は自問していた。今にも崩れそうな危ない橋を、自分は無事に渡り切れるのか。それとも、もう終わりにしたいのか。

先日買い物の中に則子は突然倒れ、三日間の検査入院を余儀なくされた。胃壁の外に巣食った癌は既に全身の骨に移し、来春までは持たないと診断された。

薄っすらと霧のかかる蒸し暑い晩、すぐに見てもらいたい死体が出たと県警本部長から直々に自宅へ電話があったのは夜中の零時を十五分回った頃だった。加瀬義則は寝支度を整えたところだったが一つため息をついて洋服に着替え、諦め顔の妻に背を向けて家の玄関を出た。終日バケツをひっくり返したように降り続いた雨は道のおちこちに深い水溜りを作り、それを器用に避けながら、職場である山梨大学まで憂鬱な気分で作車を走らせた。監察医制度のない山梨県では、異状死体が出た場合、大学の法医学教室で検死を行うのが通例で、本部長が自ら久々に加瀬を呼び出すとあれば、よほどの急ぎか、目も当てられない惨殺死体であろうと予測出来た。

別棟の地下二階にある死体検案室の前には警備員が常駐しており、加瀬が到着すると僅かに片手を挙げ、「中でお待ちです」と言った。お待ちなのが死体であるわけもなく、藤堂がいるのだと思った。長い廊下を歩く自分の足音が、誰もいない地階にやたら大きく響いた。電気も点いておらず、時々見える非常出口を示す緑の明かりが妙に寒々として見えた。

一番奥の自動ドアをくぐって手早く検査着に着替え、マスクをつけて両開きの銀色のドアを開けると、薄暗い蛍光灯の作る蒼い光の下で、シートをかけられた遺体が浮かび上がって見えた。はみ出した両足はきちんと靴を履いており、泥濘だらけの今日の甲府市を歩いたとは思えぬほど靴底が綺麗なのが印象的だった。

その遺体を両側から挟むようにして、藤堂ともう一人、力なく肩を落とした男が立っていた。

普段は法医学教室で後輩の指導に当たる加瀬は、今や事件性のある死体の検案をすることは稀だった。

県警お抱えの若手の監察医はその晩たまたま学会で東京に出ていたため、仕方なく自分を呼んだのだろうと家を出る時に思ったのだが、整った横顔で放心したようにシートに目を落とすその男を見ているうちに、どこかで会ったと思い出した。数年前の従弟の結婚式。目の前の男は花嫁の父親だった。朝倉と言ったか。

「夜分に呼び出して申し訳ない。弾丸を抜いてほしい」

その節はと挨拶でもしようとした加瀬は、藤堂の機械のような声で、急に現実を引き戻された。

シートをめくると、蠟のように白い顔がまず現れた。顔色を除けば穏やかに眠っているようにしか見えず、目を閉じていてこれだけ綺麗なら、生前はどれほどの美貌だったのだろうと思わせる死に顔だった。

「部下だ。背後から撃たれた。弾を抜いてくれ」

「弾丸は鑑識へ……」

「それはこちらでやるから、きみは俺の言うとおりにしてくれたい」

加瀬の目が動いて、藤堂を見た。

「解剖許可書は」

「本部長の俺が、今ここで大至急やってくれと頼んでいる」

藤堂は僅かな表情のぐらつきも見せなかった。加瀬の脳裏に危険信号が点った。

「そちらは怪我をされているのですか」と、賢吾を見遣った。

賢吾の白いワイシャツは血に染まっていた。藤堂も今加瀬に言われて初めて気がついたという顔をした。着替える心の余裕もなかったのかと、賢吾に対し深い同情が藤堂に沸き、その一瞬の顔色の変化を加瀬は見逃さなかった。

賢吾は黙ったまま修哉の顔を見つめていたが、涙さえ枯れ果てて真っ赤に充血した目は、自分に注意が向いたと判ってゆっくりと動き、加瀬の顔を捉えた。

目の前の人物は、娘の結婚式で幸せそうに微笑んでいた男とはまるで別人のようだった。貴族的な美貌をほころばせはにかんだように娘の晴れ姿を見つめていた男は、今は眼窩を窪ませ、衣服を血だらけにして、大きな双眸にかかる髪を避

けようともせず、穏やかに加瀬を見据えていた。まるで、そうしていれば、長年自分の探していたものが、ふいに見つかるかとも思っているかのように。永遠に失ったと思っていたものを、再び取り戻せるかのように。

この遺体は朝倉の相棒だったのだろう、と加瀬は思った。

胸骨を避けて背中から入り込んだ弾丸は左肺を斜めに横切り、左心室まで至って上行大動脈を切断していた。38スベシャルS&W、貫通能力5・7、コンマ22レミントンジェットの殺傷能力。薬莢の直径は9・65ミリ、口径の後ろにBODYGUARDというごく小さな表記があった。貫通せずに心臓へめり込んで止まっていることから、射撃距離が十数メートル以上であると考えられたが、手広く普及する九ミリパラではないこと、この弾丸を使用するS&Wボディガードは常識的に私服警察官に使用が限られることから、加瀬は咄嗟に疑念を抱いた。

死因は、急激な血液の流出が心外膜腔を圧迫したことによる心タンポナーデ、弾を食らってから死に至るまでは、ほんの数分のことだったろうと加瀬は冷静に判断した。血液の逆流が始まった時点で全身に痙攣を引き起こし、急速な心停止が訪れる。目が見開かれたままではないのは、誰かが閉じてやったのだと思った。

遺体有加瀬のメスによって切り開かれるのを、賢吾はそばにいてじっと見守っており、もはやただの肉塊と化した身体を愛しむように、何度か手を伸ばして触れようとさえした。

その度に、横に控えた藤堂に腕をそっと押さえられ、思い出したように本部長の顔を見遣って「修哉をこんなふうにするなんて、耐えられない」と、表情を微動だにせぬまま大粒の涙を溢した。俺が代わってやりたいと、首をうなだれて何度も呟き、どうして修哉なのだと低く呻いた。藤堂は何も言わず、黙って賢吾の肩を抱いていた。摘出した弾丸を乗せた滅菌トレイを差し出すと、血液で汚れたそれを、賢吾は素手で受け取って握り締めた。遺体を洗浄して縫合する間、冷たく硬直した手に指を這わせ、もうすぐ家へ連れて帰るよと優しく語りかけた。加瀬は今まで様々な遺体の検案をしてきたが、残された家族が皆一様に死の暗幕の後ろへ逃げ込むようにして息を潜める中、賢吾のような人間を見たのは初めてだと思った。死してなお、生きている人間のように話しかけ、頬に触れ、指に触れ、胸に手のひらを置き、加瀬や藤堂の見

ている前で、遺体の額に唇をつけた。

加瀬が新しい白い布を被せようとする、「顔には掛けないでくれ、苦しいだろうから」と言い、微笑んだ。加瀬は、これは、ただの相棒を失ったのではないのだと悟った。

愛していたのだ、と。

警察大学校剣道部の師範は公的にも私的にも何かと理由をつけては俺に近付き、刑事教養部を所定の期間で終えたばかりで司法警察員としてまだ実務経験のない俺を、特別捜査幹部研修所へ強引に推薦したのもこの男だった。無口な俺を飲み誘っては口説き落とそうと躍起になり、それが叶わぬとなると、今度は端正な顔をほころばせながら「彼氏がいるんじゃないや仕方ないな」と笑い、それでもめげずに何度も誘ってきた。誰もいない武道場でいきなり俺の腕を掴んで引き寄せキスしてきた時には、咄嗟に左手に握っていた竹刀で脚を払ってやったこともあった。後に神奈川県警特捜部で初めての上司となったこの男がゲイであることを公言し、お前もそうだと言った時、俺は今までの性的志向について考えたことは一度もなかったのだと気がついた。司法修習で身を粉にしている龍介とはその時ほぼ毎日顔を合わせていたが、山積みにした本に両脇を囲まれて勉強する龍介に晩飯を作ってやるだけで、決して特捜部長の思っているような甘い関係ではなかった。だが、あまりに熱狂的な上司から逃れる一心でウソの恋愛話をでっち上げているうちに、龍介とならそういう間柄になってもいいと思ひ始める自分に愕然とし、俺は変態だと思ったこともあった。飯の間だけ修習を忘れて俺の武勇伝に聞き入る龍介は、切れ長の二重に涙すら浮かべて爆笑し、そんな色っぽい話をして聞かせるのか、何だかこっちも変な気分になってくるよと照れたように言ったりした。

そんなある日、龍介は突然司法修習を放棄し、俺も警官になると言って警察大学校へ入学した。通常六ヶ月かかる初任幹部科を半分の三ヶ月で終え、死体を見るよりも顕微鏡を覗いている方がいいと、正確度と精密性で名高い群馬県警察本部鑑識課へ自ら志願し、警察組織への第一歩を踏み出した。明治神宮前の自宅からVFRで二年間無遅刻無欠勤を果たし

た後は再び大学校へ戻り、特別捜査幹部研修所において開所以来驚異の最短二十日間で資格をもぎ取った。その間に俺は特別功労賞を二度もらい警視庁捜査一課第五強行犯八係へ主任として引き抜かれ、龍介は俺のあとを追うように、本庁の現場鑑識第二課へ配属した。その後冷やかして受けた白バイ試験に合格してしまい交通課勤務を余儀なくされたが、強行犯から特殊犯捜査第一係に異動した俺に追いつき、ようやく龍介と再び机を並べることとなった。

六階大部屋の前で遠慮がちに中を覗き俺を探す龍介を、未だに鮮明に思い出すことが出来る。

初めて出逢った高校の始業式、その容貌に一瞬にして魅了されたように、その時も俺はまた我を忘れて龍介に見惚れた。自宅で見せる素顔とはまったく別の硬質な顔は、触れると切れそうだった。書類を持ったまま突っ立っている俺に気付いた龍介が瞬時に美貌をほころばせ、「やっと追いついた」と言ったのは、恐らく生涯忘れない。

「また何か考えてる」

そこでふと我に返った。

スターバックスの奥まった一席で、目の前の龍介は例によってクリームなしのクロワッサンを持ったまま、俺を上目遣いに覗いて微笑んでいた。一緒に暮らしているながら朝食は未だスターバックスという習慣を崩さずにいたのは、俺が低血圧で覚醒に一時時間を要するため、龍介はそのたびに毎朝、俺を揺すったり、なでたり、背中を支えたり、そっと抱きしめたり、様々な方法で起こそうとするのだが、そうされると今度は逆に何もかもがどうでもいい気分になり、仕事をほったらかして龍介と一日中そうしていたくなるという逆効果を生んで、結局は髭を当たりながらスーツを着て、靴を互い違いに履いたりしながら慌ててマンションを飛び出すという結果に繋がるのだった。防犯対策とかで夜十二時から朝六時まで各階停止のイライラするほどのろいエレベーターは使わず、八階から飛ぶような勢いで階段を駆け下りるのも、もはや日課となった。

龍介はそんな俺を追いかけているが、いつも笑っていた。こんなふうになるのはいいね、まるで逃走中のボニーとクライドみたいだと言いながら、三段飛ばしで風のように俺の先へ踊り出た。どっちがボニーでどっちがクライドなんだと息を弾ませながら聞くと、そんなのは誠吾がクライドに決まっている、誠吾はきつと来世でも男だからと笑い、じゃあお前は女

に生まれ変わるのかと俺が訊くと、早朝の誰もいない一階の踊り場へ先に着いて涼しい顔をしながら呼吸を整え、なだれ込んでいく俺を抱き止めて突然「愛してるよ」と言い、一瞬呆けた俺を取り残して、「今日は、俺の勝ち」と、歩き出したりするのだった。

「昔を振り返ってた……。歳かな」

「トシって……まだ三十九だよ俺たち」

「うん……」

あとのくらい、俺は龍介と一緒にいられるのだろうか？

何故俺たちは、来世の話ばかりを繰り返すのだろうか？

「今日は誠吾が倉沢に呼び出されるよ」と言い、龍介はクロワッサンの最後のひとかけらを口へ放った。「俺は昨日自販機の前で拉致されて、会議室へ連れて行かれた」

「そんなことを今頃言うのかお前は」と、俺は笑った。

「夕べはオセロで盛り上がって、それどころじゃなかったし」

そうだった。俺は龍介に十五連敗したのだ。

「ところで何でオセロなんて持ってるの」

「プレステもある」

「誠吾ってゲーム好きだったっけ？」

「殺しないRPGとテトリス系専門」

「どこに隠してるのそれ！ 今日帰ったら対戦だから！」

龍介はいつになく興奮し、鼻息まで荒くなった。俺は笑い出した。

「いいよ、やろう」

「コントローラー二つ持ってる？」

「持っていない」

「買って帰ろう！」

すっかり目が輝いている。何てことだ。こんな一面を今まで知らなかったなんて。

午後四時ごろ、木村と佐伯からの携帯メールを待ちながら仕事をするフリをしていると、大部屋の横の廊下を遠山と倉沢が早足で歩いて行くのが見えた。真鍋が少し遅れてそのあとに続いた。三人とも一分の隙もないスーツ姿で、書類かばんを持って普段かけない銀縁眼鏡の倉沢に至っては、地検のエリート特捜検事か国税庁参事官のように見えないでもなく、警視庁内でもずば抜けてセンスのいい遠山は別格として、スーツを着ていると真鍋までもがスマートに見えるのは不思議だった。鑑識課から極秘で回された新宿の付け焼刃の報告書を漫画でも読むような雰囲気でも練っていた龍介もちらりと目を上げ、そのまま上司たちの様子を興味深げに追っていた。倉沢は俺に近付き、今日はもう戻らない、公安は外事とイタリア大使館、と低い声でひとこと言っ出て行った。高岡の目は光っておらず、今日は動けるということだった。龍介は唇の両端をわずかに引っ張って微笑の形にし、去っていく倉沢の背に視線を固定したまま携帯を取り出した。画面も見ずにメールを打ち、それを一度確認して送信した後、俺に「行こう」と目顔で言った。

尾ける気だなど思い、やめておこうというように俺は首を僅かに振った。龍介は艶然と微笑んでもう一度「さあ、早く」というように俺を促した。運が良いのか悪いのか今日はVFRで出勤しており、機動隊のバイク置き場へ着く前に、やばかったら途中で引き返すぞと言いながら、結局俺は龍介についていった。

前方に行く倉沢のブジョーは俺たちの尾行にはまるで気付いていない様子で、法定速度をきっちり守って新宿方向へ左折した。都道三〇五号線を左折して今度は二〇号線に入り、二キロ先で首都高四号新宿線を走った。中央自動車道に乗ったあとは百五十キロで飛ばし始め、龍介は正確に距離を保ちつつそれを追った。一宮御坂インターチェンジで倉沢の車が石和方面へ下りたのを見届けて、俺たちは反対車線に乗るバイパスを通って東京へ引き返した。

八王子を越えたあたりで懐いた「甲府へ行くのか」という疑念は、確信へと変わった。俺と龍介の故郷へ。上司が三人も揃って。いつたい、何のために。

無言の帰宅を果たした修哉の遺体は、妻佐和子の微笑む遺影の下、昏々と眠り続けるかのような微笑を湛え、白木の棺の中にひめやかに横たわっていた。どこからともなく沸いて来た黒服の男たちが慣れた手つきで修哉に湯灌を施し、白装束を着せて死化粧を施すまでの一連の作業を、龍介は誠吾の手を握って座り込んだまま、心を奪われるようにして見入っていた。一人息子に別れを告げることもなく、突如として彼岸へ渡ってしまった父親の横顔は、殺されたというのに少しも苦痛に歪むことなく、むしろすべてを悟り、浄化するような光の輪郭に縁取られていた。重く息苦しい死の帳はそうして徐々に薄い霧へと姿かたちを変え、龍介は脳裡の片隅で数時間前に目撃した映像を何度も繰り返し返していた。則子が賢吾の拳銃で自殺しようとしたのは明らかで、自分から父親を奪おうなどと、誰一人として考えてはいなかったのだ。それなのに、死はこんな形で、突然修哉を龍介の元から連れ去って行った。十年前、この同じ十二畳の部屋で母親が息を引き取った。八歳だった幼い自分を抱いて、一緒に無言でその旅立ちを見送った父が、今は目の前で自らが旅立とうとしているのだ。古文の強化プログラムを終える頃、春日居の唐土神社で待ち合わせした。本当なら今頃は龍介と修哉はいっしょに食卓を囲んで、いつもと変わらぬ夏の一日が始まるはずだったのだ。頭の中の映像を一コマ巻き戻せば父は生きており、一コマ進めれば死んでいることが不思議でならなかった。前日まで実の母親と同じように慕ってきた則子を責める気持ちはずっと沸かず、むしろ嫉妬に狂わざるを得なかった哀れな女に同情する気にすらなつた。賢吾に対しても、ある時突然父と恋に落ちてしまったことを、どうして責められるというのだろう。だが龍介は、自分自身の中にやり場のないしんい憤恨が沸いてくるのも判っていた。後先を考えずに賢吾と則子を罵ることが出来れば、自分はどんなに楽になるかと思つた。しかしそれをするくらいなら、自分は彼らの前から何も言わずに去ることを選ぶだろう。そしてそれは同時に、誠吾を永

遠に失うことを意味する。

誠吾を失う。それだけは考えられない。

高校の始業式、視線に気付いて本から顔を上げると、深い海の底を映すような透明な瞳に出会った。その目じりが微笑の形に下がった後、「きみのその手の美しさは反則だ」という低めの声がして、形のよい唇から白い歯が覗いた。瞳をこちらへ固定したまま隣の椅子を引いて座り、左手をそっと龍介の右手へ添えて、「アサクラセイゴ。よろしく」と言った時、龍介は、長いこと彷徨いながら探していた誰かによく出逢った気がした。こんなところにいたなんて。今までどこにいたのだと訊きそうになった。瞬時に溢れ出そうとする感情を抑えて、「二カイドウリュウスケ。こちらこそよろしく」と言うのが精一杯だった。

喪服に着替えた賢吾が庭を回り、縁側から仏間へ上がった。誠吾に一切の美貌を遺伝した男は、今はすっかり修哉のかつての相棒の顔を取り戻し、龍介と目が合っても表情をまったく変えずに、棺の横を通り過ぎて葬儀社の人間の方へ近付いて行った。台所では近所の奥さんたちが忙しく立ち働いており、その中にはもちろん、則子の顔もあった。

龍介がすべてを見ていたことを知らない則子は、完璧とも言える演技で激情の噴出を抑えることに成功していた。涙を流されたら自分は何を言ってしまうかわからないと思っていたが、龍介の肩を無言で抱くだけに留めた則子を見ているうちに、夕べ目撃したことはすべて自分の錯覚なのではないかと思えてきた。そうだ。見なかつたことにすればいいのだ。そうすればもう、俺は誰も失わずに済むとさえ思いながら、何かを予感していたらしい修哉が、数日前に言ったことを思い出した。

何があっても、俺はお前を父親として、いちばん愛している。たとえ、遠く離れることになっても、どこにいても、それはきつと変わらない。出逢ったことを恐れるな、龍介。そこに始まりがあるのなら、必ず終わりがあるということなのだ。だがそれは今生の別離であって、永遠の別れではないのだよ。

肉体が滅びようとも、魂は輪廻を繰り返す。今生で知り得た縁は、必ず遠い前世から引き継がれていて、それは再び彼岸で巡り逢う運命にあるのだ。俺はまたきつとどこかでお前を待っているよ。

今度は、違う形でと、龍介は父に言った。涙が溢れて止まらなかった。子供のように父にすがりついて泣いた。修哉は優しく息子を抱きしめた。別れはもう、直前に迫っているのだと悟った。

違う形で出会えたらいいね。

誰も、不幸になることのない形で。

倉沢たちの追尾から戻った俺と龍介はそのまま家へ戻って、冷蔵庫を漁り適当なつまみを作りながら木村を待った。九時を過ぎた頃携帯に「迷った」と連絡があり、代々木公園駅を出て真っ直ぐ歩けば着く俺の家へ来るのどこをどう迷ったのかと訊けば、尾行を巻くために新宿署を出てあちこち歩いたりしているうちに方向を失ったと、事も無げに言った。その五分後にまた携帯が鳴り、玄関の外と言うのでオートロックを解除した。エレベーターで八階へ上がりようやく辿り着いた木村は、「お前んちは手書きの表札のある汚いアパートじゃあるまいと思っていたが、あまりに予想通りでおもしろえくらいだ」と笑った。

管理人がいないので何かと不便だが、個人事業者向けのこの分譲マンションはセキュリティの面ではほぼ完璧と言えた。どこを開けるにも二組の暗証番号を打ち込まなければならず、表札を出すことは禁じられており、住まいは全て四桁の番号表記のみだった。

「二階堂からメールをもらったよ。遠山たちがおめかしして出かけるから追尾するって……なんだ、一緒か」と、俺の肩越しに龍介を見遣り、ヒュウと口笛を鳴らす。

「エプロンか。似合うな。初々しい奥さんのようだ。お前らいつたいつたになったら一緒に暮らすんだ？」

「もう暮らしてるよ」と、龍介が笑いをこらえながら言った。「結婚はまだだけど」

「オアツイね、お二人さんよ。俺も幸せにあやかるとために、今日は奮発してブルネツロを進呈しよう。知り合いに熟女がいたら紹介してくれ……まあお前たちの知り合いなら、望み薄だな」と、木村はニヤニヤしながらさっさとカウン

ターキッチンまでやってきて、新聞で無造作に包んだ高級ワインを置いた。読売なんかではなく、イタリア語の新聞であるところが木村だった。どれどれ、何を作ってるんだとさっそく龍介の手元を覗き込む飢えた四係主任の背へ、俺は訊いた。

「尾行って何だ」

「おっと、食い物に目が眩んですっかり忘れてた」と、木村は振り返って笑った。

「男一人。目つきの悪さから、あれはどうみても刑事だな。明らかに行確とばれるやり方をするところを見ると、どうせただの脅しだろうけど」

「身内か」と、龍介がオードブルを盛った皿をカウンターへ置いた。やつの手にかかると、我が家の食材は魔法にかけられたように変身する。

我慢できない様子の木村が皿に目を貼り付けているので、食べよと促すと、スモークサーモンと自家製カッタージチーズの乗ったクラッカーを四つも頬張った。

「腹が減ってはなんとやらとな……少なくとも、俺の知る男ではない。強行犯の連中なら、俺が怖くてそんなことはできやしないだろうからな。おおかた高岡の忠臣あたりじゃないかと思ってる。まあ、気にするな。俺も気にしない」

そう言いつつ尾行の話をしたのは、やはり気になるからだ。

何なのだこの圧力は。神社の前に転がった女子大生の死体のウラに、一体何があるというのか。

神社といえば、修哉が殺されたのも神社だった。まったく関係のない二つの事件なのに、心が一瞬ざわついた。

カウンターでプロネットを開けながら、俺は木村に「遠山たちは甲府へ行ったらしい」と話した。甲府といえば、お前たちの故郷じゃないかという木村は、何か大きな事件でも起こったのかなと首をかしげた。

「それにしても、刑事部長と一課長と特殊犯管理官がそろってかよ。山梨県警に探りを入れてみようか」

「いや、今はやめておいたほうがいい」と、俺は言った。なぜか、そんな気がした。

「待ってれば、倉沢から何か言ってくるだろう」

「そう言えば、お前は昨日、自販機の前で倉沢に拉致されてたな」と、木村が龍介に言った。

「会議室へ連れ込まれて、俺たちはお前たちを援護すると言われたよ。そんなことなら、トイレで会ったついでに鏡越しに言えば良かったのに」と龍介は笑い、ブルネツロを煽った。頬が僅かに上気している。

「目が妙に優しくなったのが気になった。あれは何かを隠している」

「お前もか。俺もそう思った。なんか同情してるような」と、木村は身を乗り出した。

俺は黙って二人のやりとりを聞きながら、心はまだ唐土神社へと彷徨っていた。

上司たちが何かを隠しているという龍介と木村の印象はまず百パーセント信じてもいいと思えたが、同情するような目というのは何だ。山梨と何か関係があるのか。

俺の眼前から消えない夏の夜の霧は、いったい何だ。

「いやあよく食った、ありがとう。佐伯は来られなくて残念だったな」と、二時間きっかりで満足そうに帰っていく木村を見送って、玄関のドアを閉めた。隣の龍介と目が合った。

「テトリスにする？ それとももう寝るか？」

「寝ようよ」

その晩、俺は龍介にキスした。すべてはブルネツロのせいだった。

上質なワインは俺をほどよく酔わせ、嬉しそうに飲み食いする木村には悪いが、早く帰ってくれと、途中から祈るような気持ちになつていった。龍介が洗い物をして俺が食器を拭く間、衝動を抑えるのに苦労した。龍介は黙って微笑んでおり、きつと俺の考えていることなど、例によってすべて判っているのだろと思うた。交互に風呂に入り、髪を乾かし、歯を磨いて布団を敷いたところで爆発した。夏のあの日から実に三ヶ月が経過し、二度目の、今度は本気のキスだった。一度

龍介を抱きしめてしまうと、あとはもうすべてがどうでもよくなった。乱暴にならないように、それだけに気を配って、まるで初恋の相手に触れているような気がして、そうだ、龍介は俺の初恋の相手なのだ、今さらながら思った。

二十三年の忍耐をついに破った俺に驚くでもなく、龍介はごく自然に俺のキスに応えた。まるでそうなることが当たり前で、何をそんなに躊躇しているのだと問うように、何度かこちらの目を覗き込んで笑った。怖い？と訊きながら俺を抱き寄せ、指を絡めた。正直に言えば、怖かった。何がと言われればその正体は依然として不明なのだが、こうして今一緒に住んでいる間にも、また俺はいつか龍介と引き離されてしまうのではないか、それが怖いと言った。それは恋をしている証拠だよと龍介は笑い、高校で初めて逢った時、今までどこにいたのと誠吾に訊きたかったのだと言った。ずっと探していたんだ、やっと逢えたと思ったと龍介が言うのを聞くと、眼前の霧は、いきなり自分の手の先も見えないほど濃くなった。またいつか出逢えるだろうかと俺は言った。涙が出そうになる俺自身を、冷静に見つめる自分がいた。約束しよう、今のうちにと龍介は言い、その唇に俺は再びキスした。修哉と親父の死に顔が交互に浮かんで消えていった。新宿の熊野神社と春日居の唐土神社の風景が、脳裡に点滅した。

甲府市役所へ用事のあったついでに実家へ寄るつもりで、雪乃は生家へ車を走らせた。龍介の父が殺害されて七ヶ月が過ぎた、三月末の比較的暖かい午後五時過ぎだった。去年の真夏の葬送を嫌でも思い出す二階堂家の前を通る時に少し速度を落とすと、立派な門構えから手入れの行き届いた縁側が目に入り、誠吾と龍介が並んで座り膝に分厚い本を広げている様子がちらりと見えた。雪乃は少し考えたあと、車を道路の脇に駐車して門をくぐった。どうせ、帰り道に寄って土産のとよのかを置いて行くつもりだった。誠吾も一緒なら、そこで食べさせてあげようと思った。

縁側へ続く飛び石の上をローヒールで歩いてくる雪乃を認め、龍介の顔が嬉しそうにほころんだ。修哉の葬儀で見た冷徹な微笑とは違い、今は心から微笑んでいるようで、雪乃は少しばかり安心した。本に鉛筆で書き込みをしていた誠吾も

顔を上げ、「あ、雪乃」と言つて笑つた。「その紙袋は上州屋の蓐だな。さすが姉貴、弟たちの好物を判つていらつしやる」と、とよのかの入つた袋を大事そうに受け取つて台所の方へ向かつた。その時、誠吾の細い背を眺めながら、「弟たち」という言葉に、雪乃は密かに引つかりを覚えたのだつた。家族ぐるみで付き合っている龍介であり、いつもなら普通に思う弟の一言がその時は妙に寒々と響き、朝倉と二階堂の家の間で、見えない深い溝が暗黒の口を開けているような気がした。

「龍ちゃん、元気にしている？ ご飯はちゃんと食べているの？」と、雪乃はそんな思いを払拭するように龍介に尋ねた。二階堂の美しい息子は優しく微笑んでいて、しなやかな動きですつと立ち上がり、雪乃の背にそつと手を添えて促した。雪乃からすれば見上げるほどの長身で、大学入学を間近に控えた青年の、未来へ羽ばたく一種の興奮を垣間見ることも出来た。しかし、切れ長の二重の目を近くで見ると、やはりその瞳は凍つた月のように冷ややかで、一切の感情の透過を自分に許さないかわりに、それを覗こうとする者を拒絶するのでもなければ存在を否定するでもない、曖昧で非現実的な色合いを浮かべていた。心は既に凍つてしまい、二度と溶けることはないのかと、雪乃は思った。

「大丈夫だよ。上がつていって。一緒に蓐食べよう」

「ありがとう。お父さんのご霊前に、ご挨拶もさせていただきますたいし」

「うん、父さんも、おねえさんを見たら、きつと喜ぶよ」

雪乃は縁側で靴を脱いで揃え、二階堂家へ上がった。家は整然と片付いており、上京に備えてか、小さな段ボール箱がきちんと蓋をされて積まれていた。品の良い香の匂いが雪乃を包み、一瞬別世界へと誘つた。誠吾も龍介も、早くここから出て行つたほうがいいと、なぜかその時雪乃は思った。この甲府の土地を離れ、呪縛から離れ、若い二人は、自由に飛び立つて行つたほうがいい。

仏壇の中の二階堂修哉は、はがきサイズの写真の中で時を止めたまま、輝くばかりの笑みを湛えていた。この写真はいつたい誰が撮つたのだらうと、霊前に手を合わせながら雪乃は思った。妻の遺影と並んで鴨居にかかる制服を着た写真とは別だつた。満開に咲き誇る桜を背景に、端正な面影に降り注ぐ月明かりだけを頼りに撮つた、瞬間の美を収めていた。穏

やかで控えめな修哉はいつも口元に薄く微笑を湛えていて、視線をわずかに落としていた表情しか思い浮かばなかった。その男が、こんなに優しい顔をして美しい三日月形の唇をほころばせ、白い歯の花を咲かせている様子に、雪乃は茫洋としながら僅かの間見入っていた。去年の春、唐土神社の八重比丘尼が二十年の沈黙を経て再び咲いたことをふと思い出した。警察組織にいる男がこんな顔をするのは、いったいどういう時だろう。よほど嬉しい時か、事件がひと段落した時か。それとも、愛する誰かを見つめる時か。

「その写真、親父が撮った」と、誠吾の声がした。我に返って振り向くと、弟は開け放した襖に身をもたれ、仏壇の中の写真を見ていた。

「去年の花見の時。俺と龍介と、親父と修哉さんで、四人で行った」

「八重比丘尼が、二十年ぶりに花をつけたのだったわね・・・」

「うん。雪乃は見に行った？」

「ええ。終わりがけに、利雄さんの仕事の帰りに」

「俺は実はあの晩、ビールを飲んで眠りこけた。気が付いたら龍介の部屋だった」と、誠吾は笑った。父親に瓜二つの双眸を、懐古と感傷が同時に横切った。

「親父は、何だか妙に幸せそうだった。あんな顔、見たことない」

修哉の死を境に、賢吾と則子の間は急速に冷えていったのだった。子供たちの前では普段と変わらぬ様子をしているが、実家に一步脚を踏み入れた時に感じる空気がすでに違っていた。もともと無口な父はますます口を開かなくなり、連日県警に居残って帰りが遅いと聞いた。夫の利雄によれば、一課ではもう誰と組むこともなく、修哉の殺害犯人の追跡が早々と打ち切られたところから、時たま抜け殻のように自動販売機の前のソファに座って、窓の外を見ているということだった。則子は何も言わないが、雪乃は密かに、母には誰か好きな人が出来たのではないかと思っていた。仕事の相棒を失った夫がすっかり変わってしまった妻を顧みなくなってしまうからという動機は、気高い性格の母にはあまりに似つかわしくなく、修哉の死に際し、何かが起こったのだとは思っていた。誠吾はそれを知ってか知らぬか黙って微笑んでいるだけで、

龍介を連れて、一刻も早くこの土地を出て行きたいという焦燥だけが、その瞳を通して伝わってきた。

雪乃は、努めて明るい声を出した。

「来週はいよいよ引越しね。私は手伝ってあげられないけれど、利雄さんがトラックを出してくれるって。二人分の荷物なら何とかなりそうだよ」

「助かるよ。ありがとう」と誠吾は言い、手に持っていた苺を頬張った。唇が赤く染まって、色白の顔によく映えていた。誠吾は龍介の家に残ると言い、雪乃は一人で実家へ向かった。二階堂家からは歩いても十分ほどの距離で、車だといほんの数分だった。ガレージには則子の車だけがあり、賢吾はまだ県警なのだろうと思った。則子の車の横に自分のを停めて玄関へ回ると、薄手のコートを羽織った則子が、ちょうど出て来るところだった。

「おかあさん、出かけるの?」

「ああ、雪乃……。どうしたの?」

「市役所に用事があったついでに買い物をして……。あまおうを持ってきたんだけど、それだけ置いたら帰るわ。出かけるんだったら、送って行ってあげようか?」

「いいのよ、上がっていきなさい」

則子はそう言い、閉めた玄関の引き戸の鍵をまた開けた。

「あんたと久しぶりにゆっくり話したいわ」と、則子は娘を振り返って笑った。控えめに施した化粧は則子を実年齢より若く見せて、優しく微笑む日本人形のような顔立ちは、春を先取る夕陽によく映えた。光の加減か、薄く形の良い唇だけがその中に浮き上がった。雪乃の知る限り、母はめったに口紅を差さないのだが、それは雪乃の目には妙に艶かしく見えて、内心どきりとした。どこへ行くはずだったのかしら、と思った。

母は居間から一本電話を入れた。盗み聞きをしたいわけではなかったが、言葉の断片は嫌でも聞こえてきて、結果的に

耳をそば立ててしまった。娘が来たので今日は遅くなる、ご飯を食べさせてやりたいからと言ったようなことが聞こえて、最後に、ごめんなさい、またあとで電話するわと結んで受話器を置いた。

「切ったの。変かしら」

真つ直ぐな艶のある髪を顎の下で切りそろえた則子が、恥ずかしそうに耳の後ろを触って言った。

母はいつも、肩甲骨の下辺りまである長い髪をうなじの低い位置で結んでいた。雪乃が物心ついた時からいつもそうで、実は先ほど玄関先でショートカットの則子を見てびっくりしたのだが、細い面立ちで顎の形がきれいなので、とてもよく似合っていた。

「ううん、すごく似合ってる。何だかおかあさん、若返ったみたい」

「ありがと」と、則子は嬉しそうにはにかんだ。そんな母の表情は垢抜けていて、おかあさんは恋をしている、と則子は再び思った。

こうして、家族がバラバラになっていくのだと、心の奥が疼いた。

利雄に電話をするときまだ県警にいて、今日はおかあさんのところで夕食を頂いていくからと言うと、ゆっくりしておいで、俺はそれじゃあたまに同僚たちに付き合っただけで飲みにも行くよと、ほがらかな返事があった。

久々の母の手料理は、どうしても雪乃を自宅にいたころへと引き戻した。あの時は、誠吾がいて、賢吾がいて、則子は、いつも幸せそうに微笑んでいた。

菜の花のからし和えを口に運びながら、雪乃はこっそり母の横顔を見ていた。何かを言い出したくて言い出せないような、思い悩んでいるような、そんな横顔だった。

「おかあさん」

「なあに？」

「何か隠してるでしょ」

則子は無言で微笑んでいた。瞳がすうっと娘の顔から横へ逸れた。

「好きなひとが出来たの？」

「もう、ずっと前からよ」と、則子は言った。端正な顔と投げやりな声の調子がつり合わず、雪乃はそんな母の様子を箸を置いて正面から見つめた。責めるつもりなど、まったくなかった。

「どうしてわたしに相談してくれないの？」

「相談しても、どうにもなるものではないわ」

「おとうさんは知っているの？」

「賢吾は二階堂さんに取られたわ」と、則子は吐き捨てるように言った。

雪乃は、誠吾が高校へ上がった直後のことを思い出した。

あの時は確か、利雄さんが二階堂さんの話をしていて、おとうさんが黙って微笑んでいたのだ。それを見たわたしは、どうしてかわからないけれど、妙な胸騒ぎ覚えたのだった。

「取られた、って……」

「惚れてしまったのよ。男の人に。あの賢吾が。信じられる？」

食卓の一点を凝視しながら、則子は何かが切れたように、訥々と話し出した。

「浮気とか、身体の関係だけだったら、我慢が出来たかもしれない」

涼しい目元に、鋭利な刃物の切っ先のような冷たい光と、激しい後悔と自責の念とが交互に現れた。

「心をすっかり奪われていた……。賢吾は、恋をしていたわ。あのひとのあんなに輝いた横顔、わたしは見たことがなかった」

瞬きをすると、右目から透明の涙が一粒落ちた。生まれて初めて見る母の涙だった。

仏壇の修哉の写真が脳裡に蘇った。

「その写真、親父が撮った」と言う、誠吾の声も。

「わたしには、あんな顔、見せてくれたことがなかった」

そう言つて、則子は薬指の腹で涙を拭つた。白くて華奢な指だった。

「二階堂さんの勝ちよ。賢吾の心を持ったまま、逝つてしまったのだから」

則子はうなだれ、「死ぬのはわたしのほうが良かったのに」と低い声で呻いた。

黒目が空洞のように見開かれていた。

わたしは、自殺しようとしただけなのよ。それなのに、どうして二階堂さんが。

「おかあさん、もういいわ。言わなくていい」

雪乃は、それ以上聞きたくないと思つた。心の中で、形にならない様々な疑惑が恐ろしい勢いで渦巻いていた。そんなはずはない、うちの家族に限つてと思ひながら、修哉の死の場所にいたかのように話す則子の声が、千切れそうになりながら繋がっている一縷の望みを断ち切ろうとしていた。自分は、これ以上知つてはいけなかつたと思つた。

「二階堂さんを……」

「おかあさんやめて！ それ以上言わないで！ 何も聞きたくない！」

雪乃は耳を塞いで立ち上がった。食卓を倒しそうな勢いで則子の後ろへ回り、細い肩に両腕を回し、首を抱いた。驚愕と恐怖で涙が溢れてきた。どうして、どうしてと、何度も繰り返した。

誠吾、早く行きなさい。

早く。

佐伯は、手にした招待客リストの名前を、また一人黒いボールペンで消した。リストの約半分はそうして黒く埋まつていたが、未だに成果なしだった。

「やっぱり図書館で職業名鑑とかあたってからのほうがよかつたんじゃないのか」

木村は運転席のシートに背をはり付けて、ウーンと伸びをした。ついでに大きなあくびまで披露して、目に薄っすらと